遠藤周作原作の映画

「沈黙」のモデル キアラの墓碑

調布市指定有形文化財（歴史資料）

サレジオ神学院 チマッティ資料館

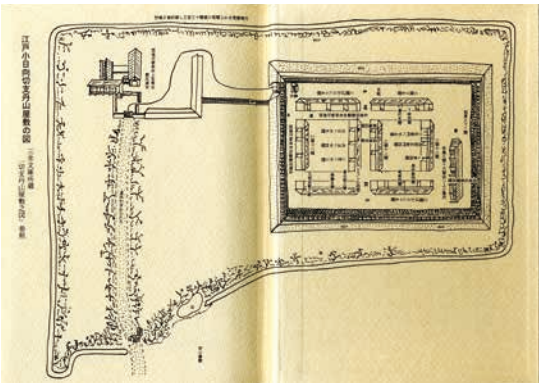
江戸切支丹屋敷

東京メトロ丸ノ内線茗荷谷駅から徒歩8分、文京区小日向1丁目に「キリシタン屋敷跡（別名・山屋敷）」がある。そこへ向かう途中、「切支丹坂」など記憶をなぞる名が残っているが、今、一帯は住宅地になり面影を思い起こせない。鎖国令が敷かれ禁教政策が一番厳重になった17世紀半ば、潜入し捕縛され拷問によって転んで棄教した宣教師たちがそこに収容された。当時の幕府は、殉教がキリシタンの信仰心を強めることを見て背教者を作ることに方針に替え、1640年、キリシタン奉行に就任した井上政重の下屋敷を改築し、1646年、そこに棄教者を収容することにした。

キリシタン屋敷跡の記念碑

「沈黙」の映画のモデルで有名になり、墓碑が調布サレジオ神学院にある宣教師ジュゼッペ・キアラ神父も、1643年に日本に潜入し、1646年から死んだ1685年までここに監禁された。

さらに、2014年キリシタン屋敷跡でその墓と遺骨が発見され話題になったもう一人のイタリア人、1708年に潜入し、新井白石の尋問を受けたシドッティ神父も1714年この屋敷で殉教した。新井白石はその尋問に基づいて日本の歴史に知られている「西洋記聞」を書いた。



当時のキリシタン屋敷の見取り図

では、なぜ、鎖国中、この人たちは命がけで日本に潜入してきたのであろうか。

答えは遠藤周作の代表作『沈黙』に見いだされる。

話題を起こした『沈黙』

遠藤周作の本は国内外で愛読され、2017年1月、監督マルティーン・スコルセッシによる同名の映画が日本でも公開された。主人公ロドリゴのモデルはキアラ神父である。彼が日本に潜入したのは、キリシタン迫害中に起こった事件のためであった。

1633年、イエズス会管区長代行や日本司教代行を兼ねていたポルトガル人フェレイラ神父（1580～1650）は、長崎で捕縛され穴吊りにかけられて3日後、最初の「転びバテレン」となった。このニュースはヨーロッパに伝わり、教会、殊にイエズス会に大衝撃を与えた。この汚点を洗い、フェレイラを信仰に戻すために10名のイエズス会員が日本へ向かうことにした。キアラはその一人であった。

一行はマニラに逗留し、そこで追放された日本人から日本語を学び渡航の計画を練った。まずマストリーリ神父が単独で上陸したが、すぐ捕らえられ殉教した。他は、二グループに分かれた。まずルビノを団長とするグループが潜入し、彼らも殉教した。次に1643年6月27日、マルケス準管区長が指揮し、キアラも含まれていた第2グループが北九州の築前国宗像郡梶目の大島に上陸した。すぐ捕まり長崎奉行所、また8月27日には江戸へ送られ、小伝馬町の牢屋に入られた。幕府は彼らを転ばせるために長崎から通訳の

オランダ人と共にフェレイラを江戸に来させた。仲間の前に現れたフェレイラは、「お前たちは神が全能だと言うが、神から見捨てられている。お前たちが苦しめられても神は黙っているのではないか。日本の天皇の方はお前たちの神より強い」と攻めたが、彼らはこれに反論した。たまたまこのやり取りに何名かのオランダ船員が立ち会った。後に彼らはその時に見た状況を記録し外国に伝えた。有名なモンタヌスもその状況を版画を描いた。

フェレイラが戻ってから、キアラたちは穴吊りの拷問にかけられ数日耐えたが、ついに転んでしまった。(2人が信仰に戻ると言っても、幕府は認めなかった)。1646年、棄教者としてキリシタン屋敷に収容された。キアラは岡本三右衛門という罪人の日本名を与えられ、妻も与えられた。彼は40年も屋敷から出ることなく、晩年1674年、役人からキリスト教の教義について書くことを要求され『天主教大意』3巻を執筆した。それを受け取った役人たちは「これは日本の考え方に合わない」と言って信仰に戻ったと疑い、何回も尋問した。なお、お寺の檀家になるようにも勧めたが、本人は断った。ついに1685年7月25日に病死し、その遺体が火葬され、小石川無量院に埋葬された。一か月後墓石が建てられ、戒名は「入専淨真居士」と書かれた。

遠藤周作の言う「沈黙」は、つまり「神の沈黙」である。現代も世の中に罪悪、戦争やテロの残虐、罪のない人の苦しみ、迫害の時の残酷さがあり、神はそれに対して黙っているように見える。なぜであろうか。確かに悪は人間の自由の業であるが、なぜ神はその自由を許されるのか。キアラの墓碑はその問題を考えさせる。もしすべてはそのままで終われば、殉教もすべても無意味である。

キアラ神父の肖像発見

キアラ神父は1602年頃シチリア島パレルモ県、パレルモ市から100キロほど南にあるキューサ・スカラーファニに生まれた。2016年5月、チマッティ資料館のコンプリ神父は巡礼でそこを訪れた。事前に教会と連絡を取ってキアラ神父のための追悼ミサをささげ、ミサ後主任司祭は一枚の油彩画(約90×60㎝)を持ってきた。キアラの肖像画だと説明した。首に数本の竹串が刺さっている姿で、地元では「殉教した」と言う。それは、フェレイラとの対面に立ち会ったオランダ船員がベトナムに寄港したとき、そう報告したからである。そこの宣教師フィリポ・マリニは1649年、手紙でイエズス会の本部にそのことを伝えた。肖像画はそれに基づいて描かれた。その下にラテン語で次の言葉が書いてある。「イエズス会士ヨゼフ・キアラはキューザ市で貴族のキアラ家から生まれ、聖F.ザビエルの出現により尊者マストリーリを団長としたインドへの特別宣教団に選ばれ、まず長い航行中、火災、飢饉、渇き、ペスト、戦争の種々の困難を乗り越えて、迫害による死の危険を忍耐強く忍び、ついに日本にたどり着いた。そこには、昼夜森林に過ごしながら自分の使命と活動の頂点に達し、住民から信仰のゆえに残酷にも尖った竹で首を刺され、長い苦しみののち帰天し、1649年頃殉教の冠を得た。」

キアラが貴族出身だったので、肖像に驚くことはない。ただ、殉教の情報は明らかに間違っている。

墓碑がサレジオ神学院にたどり着いた道

墓碑は元々小石川の無量院にあったが、1940年、キリシタン研究に熱心なサレジオ会員タシナリ神父(1912〜2012)はキリシタン屋敷を調査し、無量院に墓碑がなかった。その後、雑司ヶ谷墓地に移されたことを知った。というのは、無量院は広大な境内を持っていたが、次第に勢力が衰え、1908年の都市区画整理の時に大きく縮小された。1909年6月29日、キアラ神父の墓碑は雑司ヶ谷の内藤整の墓所に移された。そこでそれを発見したタシナリ神父は、1943年、引き取りたい旨を管理人に伝えたが、親族ではないため、それを尊敬しているしるしを示すように言われた。そのため、二ヶ月にわたって毎日曜日花を供えてその前で祈った。その姿に心打たれた管理人は了承し移すことを許可した。

同年6月3日、タシナリ神父は墓碑を練馬のサレジオ神学院に移した。その日誌にこう書いてある。

『3日木曜日 主の昇天の祭日　今日の午後、タシナリ神父は修練者と数名の神学生の協力を得て、キアラ神父の墓碑を家に運んだ。キアラ神父は、信仰のために40年間幽閉されてから1685年キリシタン屋敷で亡くなった。その墓碑は、宣教師が亡くなった時にあった場所から移され、ある家庭の所有にあった。数日前、所有者は、日本宣教

キアラ神父の墓碑とタシナリ神父

の歴史の専門家でよく知られているタシナリ神父にそれを寄贈した。神父は、早速、雨にもかかわらず、神学院にそれを移してきた。

5日土曜日　今日午後、キアラ神父の墓碑が立てられた。場所は、神学院の前の庭、入り口の右にある応接間の窓の前である。墓碑の素材は日本で墓碑によく使われる硬い石で、四つの部分からなっている。土台、四角柱の本体、帽子（当時のポルトガル人また宣教師たちが使っていた形の石の帽子）と、日本で墓碑の土台の前に置く花を飾るための石の器である。

墓碑には次の文字が刻まれている。上は梵字、柱の中央には「貞享二乙丑年　入専淨眞信士霊位　七月廿五日」という戒名と年代。日本語の「信士」とは「清信士」の略、それは一般男子の仏教徒、または死後仏教葬儀を行われた男子に与えられる。「入専浄眞（ニュウセンジョウシン）」は、お坊さんが与えた戒名である。』

調布へ移されたのは、戦後1950年9月。その時、サレジオ神学院の移転と共にキアラ神父の墓碑も移され、今、チマッティ資料館前の庭に安置されている。

調布市、文化財に指定する

2016年1月29日、調布市の市議会はキアラの墓碑を文化財に指定した。指定書にこう書いてある。「本墓碑は、鎖国禁教政策という我が国の重要な歴史と、それに関わる人物の遺品として学術的価値が高く、また、キリシタン墓碑研究の上でも希少な事例として重要である。右を調布市指定有形文化財（歴史資料）に指定する。」

墓石の科学的見解では、保存状態は良好である。「入専」はジュゼッペの当て字であると思われる。

専門家の話では、これほど完全な状態で保存されているキリシタン墓石は全国では珍しい。

現在、調布市の観光マップにも掲載され、一般の人の訪問も増えている。キアラの人生を通じて歴史を知り、その心に思いを馳せることによって人生の意味を考える。

最後の殉教者シドッティ

キアラ神父の没後、キリシタン屋敷にヨハネ・バプティスタ・シドッティ神父も幽閉された。タシナリ神父が1940年に現地調査をしたとき、その墓碑と思われる十字架の刻まれている石も見つかったが、今は行方不明となっている。

シドッティ潜入の目的は、将軍に会ってキリスト教の迫害をやめてもらうことであった。それを果たせなかったが、屋敷でその世話係となった長助・はるという老夫婦は、ある日、シドッティに感化され洗礼を受けた。役人にそのことを告白したら、三人とも別々に地下牢に入れられ、シドッティは10ヶ月後1714年10月21日に46歳で衰弱死した。前述のコンプリ神父の巡礼の時、パレルモの大聖堂で、シドッティ神父の兄フィリッポの肖像も見つかった。

2014年その跡地に三体の人骨が発掘されたが、国立科学博物館などのDNA鑑定により、2016年4月4日、「一体はシドッティであると確定され、残り二体は長助・はるであると思われる」と発表された。

シドッティの所持品であったカルロ・ドルチ作の聖母の図像（通称「親指のマリア」）は現在東京国立博物館が所蔵し、重要文化財に指定されている。

もう一つの大事な発見

現在、バチカンで一万点ほどのキリシタン資料の整理分析が行われている。これらはイタリア人宣教師サレジオ会員マリオ・マレガ神父（1902?1978）が戦前、大分や臼杵の教会に赴任し、子供たちが何か丸めたもので遊んでいる様子に出会い、拾い上げてみたところ、キリシタン迫害の歴史を繙く文書であることが分かった。貴重な史料が残されていることを知り、地元の協力を得ながら時間と費用をかけ、迫害の歴史に関する資料を探し出しその発見に尽力した。1942年に『豊後切支丹史料』を、1946年には『続豊後切支丹史料』を刊行した。

1953年、難を逃れた文書群をバチカン図書館へ移管した。2013年、1万点を超える史料やマレガの手書き原稿、メモなどを収めた箱がバチカン図書館で発見され、日本にも文書の概要調査や公開に向けた整備への協力が依頼された。2014年にバチカン図書館と国文学研究資料館人間文化研究機構との間で協定が締結された。発足した「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査・研究」班には国立歴史民俗博物館、東京大学史料編纂所、大分県立先哲史料館も参加し、キリシタンおよび日欧交渉研究に関する学術情報基盤の整理作業が進んでいる。

これらを通して、謎になっている日本の迫害の歴史がより明確になるであろう。

ジュセッペ・キアラ(Giuseppe Chiara) とジョヴァンニ・シドッティ (Giovanni B. Sidotti) 年表

1603年	ジュセッペ・キアラ、イタリアのシチリア島パレルモ県キウーザ・スクラーファニ（Chiusa Sclafani）で生まれる。
1614年9月22日	幕府、キリシタン宣教師の海外追放を命じ、本格的な迫害が始まる。
1623年9月2日	ジュセッペ・キアラ、ナポリでイエズス会入会。
1627年	ジュセッペ・キアラ、司祭叙階、数年教師を務める。
1633年10月	長崎でイエズス会管区長代行フェレイラ神父棄教。同会と教会に大衝撃。
1635年4月13日	フェレイラを信仰に戻すためにマルチェロ・マストリリ（Marcello Fr. Mastrilli）神父を団長にキアラ神父たち10名が日本へ向かう。
1636年4月	ゴアからフィリピンへ流されて、7月31日マニラに着く。
1637年9月19日	マストリリ神父、単独で日本に潜入。10月17日長崎で殉教。
1637年〜1638年	島原の乱
1639年	その後、マカオで日本語を学び、2グループに分かれて日本に入る計画がたてられる。
1642年8月17日	アントニオ・ルビノ（Antonio Rubino）神父を団長とする第1グループが日本に潜入。
1643年1月27日	長崎で殉教。
1643年6月27日	ペドロ・マルケス（Pedro Marquez）神父を団長に、ジュセッペ・キアラ、アロンゾ・アロヨ（Alonso de Arroyo）、フランシスコ・カッソラ（Franisco Cassola）の4神父, 他6名がマニラから築前国宗像郡梶目の大島に上陸。捕らえられ長崎奉行所へ送られる。
1643年8月27日	江戸へ移転、小伝馬町牢屋に入る。フェレイラの前で尋問を受けてから、穴吊りの拷問に耐えられず全員が転ぶ。キアラ神父は処刑武士三右衛門の名前と、相模国の処刑人の妻を与えられ、飯田町の牢に入り、何度も取り調べられる
1646年11月16日	新設された日向のキリシタン屋敷へ移送。当時の図面に部屋割りも記されている。
1650年10月12日	背教者フェレイラ死去。
1656年	キリシタン屋敷でフランシスコ・カッソラ死去。
1668年	ジョヴァンニ・シドッティがシチリア島のパレルモで生まれる。ローマの宣教聖省の神学校で学び、教区司祭になり聖省に務める。
1674年2月15日	キアラ神父、キリスト教の教え三巻「キリスタン宗門の書」を書く。
1675年11月21日	その内容のために信仰復帰を疑われ、尋問を受ける。寺の檀家になることを断る。
1677年9月8日	所有していた本の目録が書かれる。
1685年7月25日	キアラ神父、キリシタン屋敷で死去。遺体は火葬される。
1685年9月2日	無量院で墓碑が完成される。戒名は「入専浄真信士霊位」。
1695年2月27日	与えられた妻が74歳で死去
1700年7月16日	キリシタン屋敷で最後の収容者二宮トナトが死去。
1701年12月25日	屋敷が三分の一に縮小される。残りは武家の住宅に移される。
1703年	小伝馬町牢屋が焼失。一時収容者はキリシタン屋敷に移される。
1703年7月	シドッティ神父、ローマで日本への派遣を願い、教皇クレメンテ11世により派遣される。
1704年9月9日	シドッティ神父、マニラに到着。4年間大活躍し、住み着いた日本人から日本語を学ぶ。
1708年10月11日	シドッティ神父、屋久島に上陸。数日後鹿児島へ到着。長崎の奉行所へ移され、後に江戸へ送られる。
1709年11月1日	新井白石がキリシタン屋敷で尋問を担当。キアラの「キリシタン宗門の書」を読む。その証言で『西洋紀聞』を書く。長介と春夫妻がシドッティ神父を世話する。
1714年10月7日	キリシタンになった長介（55歳）と春が処刑される（毒殺か）
1714年10月21日	シドッティ神父、地下牢に下されて殉教する（47歳）。遺体は「裏門脇」に土葬。
1725年2月14日	キリシタン屋敷焼失
1792年9月17日	老中建議によりキリシタン屋敷が廃止される。
1798年	本田利明はキアラ神父の「キリシタン宗門の書」を読み、『西域物語』の中にキアラを「大導師」と呼ぶ。その後「キリシタン宗門の書」が行方不明となる。
1909年6月29日	無量院境内縮小のため、キアラ墓碑は雑司ヶ谷の内藤整の墓所へ移される。
1940年	サレジオ会員タシナリ神父、キリシタン屋敷跡を調査。十字架があるシドッティ神父の墓標を発見。調査記『殉教者シドッティ』（1941年）を発表。
1943年6月3日	雑司ヶ谷墓地でキアラ神父の墓碑を発見。管理人の許可を得て、練馬サレジオ神学院へ移す。
1950年9月	キアラ神父の墓碑、サレジオ神学院と共に調布市へ移転される。
2014年7月28日	キリシタン屋敷跡で埋蔵文化財発掘。三基の墓を発見、科学調査始まる。
2016年1月29日	調布市、キアラ神父の墓碑を歴史有形文化財に指定。
2016年4月4日	文京区、遺骨のDNA科学調査を発表。シドッティ神父のものである。他の二基は春と長介の可能性が高い。

チマッティ資料館　〒182-0033　調布市富士見町3-21-12　TEL：042-482-3117　FAX：042-490-6707
E-メール：db@v-cimatti.com　URL：http://www.v-cimatti.com